

音読教材 新美南吉「王さまと靴屋」

ある日、王さまはこじきのようなようすをして、ひとり町へやってゆきました。

町には小さな靴屋がいつけんあって、おじさんがせつせと靴をつくっておりました。

王さまは靴屋の店にはいつて、

「これこれ、じいや、そのほうはなんとという名まえか。」
とたずねました。

靴屋のじいさんは、そのかたが王さまであるとは知りませんでしたので、

「ひとにものをきくなら、もっとていねいにいうものだよ。」

と、つつけんどんにいつて、とんとんと仕事をしていました。

「これ、名まえはなんと申すぞ。」

とまた王さまはたずねました。

「ひとにくちをきくには、もっとていねいにいうものだというのに。」

とじいさんはまた、ぶっきらぼうにいつて、仕事をしつづけました。

王さまは、なるほどじぶんがまちがっていた、と思つて、こんどはやさしく、

「おまえの名まえを教へておくれ。」

とたのみました。

「わしの名まえは、マギステルだ。」

とじいさんは、やっと名まえを教えました。

そこで王さまは、

「マギステルのじいさん、ないしょのはなしだが、おまえはこの国の王さまはばかやろうだとおもわないか。」

とたずねました。

「おもわないよ。」

とマギステルじいさんはこたえました。

「それでは、こゆびのさきほどばかだとはおもわないか。」

と王さまはまたたずねました。

「おもわないよ。」

とマギステルじいさんはこたえて、靴のかかとをうちつけました。

「もしおまえが、王さまはこゆびのさきほどばかだといったら、わしはこれやるよ。だれもほかにきいてやしないから、だいじょうぶだよ。」

と王さまは、金の時計をポケットから出して、じいさんのひざにのせました。

「この国の王さまがばかだといえればこれをくれるのかい。」

とじいさんは、金づちをもった手をわきにたれて、ひざの上の時計をみました。

「うん、小さい声で、ほんのひとくちいえばあげるよ。」

と王さまは手をもみあわせながらいきました。

するとじいさんは、やにわにその時計をひつつかんで床のうえにたたきつけ

ました。

「さつさと出てうせろ。ぐずぐずしてるとぶちころしてしまうぞ。不忠者めが。」

この国の王さまほどごりっぱなおかたが、世界中にまたとあるかッ。」

そして、もっていた金づちをふりあげました。

王さまは靴屋の店からとびだしました。とびだすとき、ひおいの棒にごっつん

と頭をぶつけて、大きなこぶをつくりました。

けれど王さまは、こころを花のようにあかるくして、

「わしの人民はよい人民だ。わしの人民はよい人民だ。」

とくりかえしながら、宮殿のほうへかえってゆきました。